

【原 著】

子どもの主体的な身体表現を引き出すリトミックの
保育実践研究（第一報）
—保育施設における1・2・3歳児学級の事例を中心に—

小竹 沙織 馬場 訓子 高橋 慧 渡邊 祐三 高橋 敏之

Childcare Practice Study of Rythmique that Draws Proactive Physical Expression from Children (1st Report)
—Mainly Including Cases of Classes for One, Two, and Three Years Old in a Childcare Facility—

Saori KOTAKE, Noriko BABA, Kei TAKAHASHI, Yuzo WATANABE,
Toshiyuki TAKAHASHI

2020

岡山大学教師教育開発センター紀要 第10号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.10, March 2020

子どもの主体的な身体表現を引き出すリトミックの 保育実践研究（第一報）

—保育施設における1・2・3歳児学級の事例を中心に—

小竹 沙織※1 馬場 訓子※2 高橋 慧※3
渡邊 祐三※1※4 高橋 敏之※5

近年の先行研究を「身体表現」「音楽教育」「リトミック」「遊戯」をキーワードに概観すると、100年を超える歴史の中で、リトミックの捉え方が変容していることと、リトミックの新しい保育実践研究が必要であることが、明らかになった。そこで本論では、保育施設におけるリトミックの実践から、子どもが何を学び、何が育っているのかを論考した。その結果、以下のことが示唆された。(1)1歳児学級の子どもは、保育者の模倣を活発に行う段階である。(2)2歳児学級においては、子どもが自由に想像し表現できるよう、保育者は、配慮する必要がある。(3)3歳児学級においては、表現することの楽しさを通して心が解放される気持ち良さを感じることや、リトミックの主題や保育者の姿に集中することや、何かを達成する喜びを感じることも等が重要である。

キーワード：子ども、身体表現、リトミック、保育実践、1・2・3歳児学級

- ※1 御南まんまるこども園
- ※2 くらしき作陽大学子ども教育学部子ども教育学科
- ※3 作陽音楽短期大学音楽学科幼児教育専攻
- ※4 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生
- ※5 岡山大学大学院教育学研究科

I リトミックにおける新しい保育実践開発の必要性

本論は、子どもの主体的な身体表現を引き出すリトミックの保育実践研究の第一報として、保育施設における1・2・3歳児学級の事例を中心に考察するものである。まず、「身体表現」「音楽教育」「リトミック」「遊戯」をキーワードに近年の学術研究の成果を俯瞰しながら、保育における現状と問題点を探ってみよう。

1 リトミックの指導や援助における困難

遠藤晶(2006)⁽¹⁾は、保育者が感じている身体表現活動の指導の難しさを調査した。第1に、子どもが保育者の話や音楽を聞く等の基本的なことができないことである。第2に、子どもが自発的・創造的な表現をしないことである。第3に、解放的な活動の保証と保育意図の達成の両立である。保育者からは、「ふざけてしまう」等の回答があった。また、「子どもの表現をうまく引き出せ

ない」等、保育者自身が苦手意識を持っていることが判明した。

多胡綾花(2012)⁽²⁾は、身体表現は、表現の基本であると考えられる一方で、「音楽リズム」や「絵画製作」が優先され、十分に実践されてきたとは言いがたいと述べている。また、多胡(2012)の研究調査から示唆されるのは、「身体表現遊び」における段階的な保育を行う必要性である。乳児期を始点とする発達過程に適合した保育実践の開発が求められる。

岩崎光弘(2012)⁽³⁾は、「一般的に、現在の遊戯には子どもによる自由な表現や想像、創造的な表現が取り込まれているとは思えない」と指摘した上で、リトミックの「表現の仕方、動きの自由さ」が遊戯にはないとし、現在の保育におけるリトミックの有効性を主張している。

多胡彩花(2013)⁽⁴⁾の研究からは、保育者の手本・見本・模範としての役割の重要性が窺い知れる。一方で、それが表現の押し付けになってはいないかと、多くの保育者が悩むところにもなっており、指導の難しさが確認できる。

以上の先行研究の概観から、保育現場におけるリトミックの指導や援助は、非常に困難である現状が明らかになった。

2 リトミックに対する認識の変容

リトミックとは、身体運動を通して行う音楽教育法として創案されたものである⁽⁵⁾。音楽を聞く、歌う、演奏する、作るといった音楽教育の学びを、身体を動かす経験を通して感じ取っていくのがリトミックの教育法だと言える。

長島礼(2010)⁽⁶⁾は、保育者のリトミックに対する理解が音楽教育と人間教育の枠組みで分類できることを示した。音楽教育とは、「リズム感を養う、音楽的な感性を養う、音楽的なセンスを高める」というもので、人間教育とは「豊かな人生を築くために必要な能力(想像力、創造性、自己表現能力、社交性、集中力、瞬発力、反射性等)の発達を促す」というものである。土井禮子(2011)⁽⁷⁾は、「心の教育、情操教育の中心となる」音楽と「体の教育、健康教育の中心となる」体育が含まれるリトミックは、「心と体の健全な発達が強く望まれ」る幼児教育において重要だと指摘している。岩崎光弘(2012)⁽⁸⁾は、リトミックの特徴として「自由な表現」「自発性」「動きの自由さ」等を挙げ、音楽教育の枠組みを超えて保育内容5領域を包含した活動を行うべきであると主張した。多胡彩花(2013)⁽⁹⁾は、身体表現遊びをする上で、多くの保育者が、「十分に体を動かす」「友達と一緒にあそびを楽しむ」「自分なりに表現する」「保育士と一緒にあそびを楽しむ」ことを重視しているとした。長島礼・五味克久(2014)⁽¹⁰⁾は、『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』で重視されている「自己表現」と「コミュニケーション」の観点で今後のリトミックを展望する必要性を論じている。井上裕子(2015)⁽¹¹⁾は、「リズム運動を教えることは音楽を基盤とするものであるが、単に音楽学習の準備であるにとどまらず、むしろそれ以上に一般教養の一体系である」との見解を示している。

以上の先行研究の概観から、リトミックの捉え方は創案当初のものから変容していることが確認できる。

II 保育施設の1・2・3歳児学級におけるリトミックの実践

1 保育実践の研究目的

前述した先行研究の概観から、100年を超える歴史の中で、リトミックの捉え方が変容していることが洗い出され、同時に、リトミックの新しい保育実践研究が必要であることが浮き彫りにされた。つまり、実際に保育現場で働く保育者はリトミックの名前は知っていても、リトミックとは何なのか、自分が行う保育はリトミックと呼ぶことができるのか、リトミックの活動をするためにはどのような活動をすれば良いのか等の判断が難しく、保育方法に悩んでいるという事実がある。そして、リトミックを取り入れてみたいと思っても、そもそも何をすれば良いのか、また、どんな活動をすれば子どもにとって有意義になるのか、よく分からないといったリトミックの活動の困難さを感じていると予想される。また、一般のリトミック教室で行われるリトミックと保育施設で行われるリトミックには相違点があり、指導する側がねらいとする子どもの姿も異なることが推察される。そして、保育施設で行われるリトミックは、子どもの学びや身に付く力が多様であることが予想される。以上のようなことを前提にして本論では、実際に保育施設で行われるリトミックの実践から子どもにどのような力が付くのか、そして、今後の保育施設におけるリトミックの望ましい在り方とはどのようなものかについて保育実践を基に考察する。

2 研究方法

(1) 園の概要

構造：鉄骨造1階建、敷地面積：1288.02 m²、延床面積：453.32 m²、所要室：乳児室・遊戯室・保育室（2室）・給食室・相談室・事務所等、利用定員：満3歳児以上10名、満1歳以上～満3歳未満の子ども22名、満1歳未満の子ども8名、計40名。

(2) 実施対象及び指導者

〇県P市内の私立X保育園の1歳児学級19名、2歳児学級14名、3歳児学級13名を対象にした。『保育所保育指針』は、「ねらい」と「内容」を、乳児（0～3歳未満児）と幼児（3～6歳児）で区別している。そのため、3歳児の実践は本来、1・2歳児ではなく4・5歳児と同じ区分で実践するのが望ましい。しかし、X保育園には、当時4・5歳児が在園していなかったことから、『保育所保育指針』における区分に則ることよりも、発達過程による違いや変化の考察を優先させるために、1～3歳児の区分で実践を行った。また、指導者について、学級担任ではない一人の保育者が一貫して1～3歳児のリトミックの活動の指導に当たった。

(3) 観察日

201X年1月19日（1～3歳児学級）。

(4) カンファレンス日

201X年2月21日(1～3歳児学級)。

(5) 実施方法

保育者から活動のねらいを聞き取りした上で、1～3歳児それぞれのリトミックの活動時間に保育者と子どもの姿や発言等を観察・記録する。後日、保育実践後に記入した保育者の成果・反省や第1著者の感想・考察等を基にカンファレンスを行い、子どもの育ちや保育者が考える子どもの育ってほしい姿、リトミックの活動中に保育者が意図していたこと等を議論した。

(6) 倫理的配慮

本論のデータ収集を実施した保育園は、保育実践研究に積極的な私立園であり、園長が保護者に対し、年度当初に子どもの作品や発言等を、学術論文を含む研究に使用する許諾を取り、合意形成しているので、倫理的配慮には全く問題はない。

3 1歳児学級のリトミックの実践例

(1) 実践記録

実際の保育で行われたリトミックの実践の概要については、表1に示した通りである。

(2) 保育観察の分析と考察

1歳児学級は、「冬の森の中で」を主題にリトミックを行った。森に住むウサギやクマやオオカミに変身することで、ピアノの音だけではなかなかイメージしづらい1歳児学級の子どもも想像しやすく、表現しやすいような主題になっている。また、ウサギでは「ジャンプ」、クマでは「這う」、眠る音楽では「転がる」、散歩の音楽では「歩く」、オオカミの音楽では「走る」というように、色々な体の動きができるようになっており、子どもは伸び伸びと身体を動かしていた。

ピアノの音のみで「これはウサギの音楽だ」「これはクマの音楽だ」と判別することは難しいため、ピアノの音楽が変わる度に保育者が「ピョンピョンウサギさんがやってきたよ」「次はのっそりクマさんだよ」と具体的な言葉掛けを行い、音の違いを感じられるようにしていた。多くの子どもがピアノの音が変わった瞬間に、今までしていた動きを止め、ピアノの方へ視線を向けたり保育者の様子を伺ったりしていたことから、ピアノの音をよく聞こうとしていることが確認できる。特に、オオカミの音楽では、それまでと明らかに音が低く、怖いイメージの音楽だったため、保育者の言葉掛けがある前に「あ、オオカミじゃない？」と気付く子どもも見られた。つまり、音の高さやリズムの違いから音楽の雰囲気の違いに気付いていることが読み取れる。しかし、音の違いには気付くものの「ウサギさんだよ」「クマさんだよ」と保育者に言われても、子ど

もはどう動いて良いか分からない様子だったため、保育者がウサギの真似をしてジャンプしたりクマのように這ったりしている姿を、子どもなりに模倣しながら動いていた。1歳児学級の子どもは、自ら感じたままに動くという段階ではなく、保育者の模倣を日々行うことで、徐々に自分なりに表現することを身に付けてゆくと推測できる。

この模倣の段階では、1歳児学級の子どもが見たことがある身近なものとして動物等が表現しやすく発達過程に合っていると考えられる。また、「ジャンプ」や「這う」といった動きよりも「歩く」「走る」といった日常的によく行われる動きの方が表現しやすいようだったため、なかなかリトミックに取り組みづらい子どもには無理に誘うことなく、保育者自身が楽しんで表現する姿を見せ、動きやすい表現の時に一緒に手を繋いで歩くといった誘い方が効果的であると考えられる。また、子どもが少しでも表現しやすいように具体的な言葉掛けや分かりやすい音楽を取り入れることに配慮しなければならない。

（3）保育者との実践の振り返り

1歳児学級のリトミックにおける育ってほしい姿としては、模倣を楽しむことと、のびのびと表現することが挙げられる。

X保育園では、リトミックのみの年間計画を立てているわけではなく、月案や週案に記載されているねらいを達成するための1つの手段として、リトミックの活動を行っていた。また、子どもが普段の生活で歌っている曲や聴いている曲を使って、リズム遊びや表現遊びを実践していた。特にX保育園では、遠足や園外活動の後に、よく行われていた。これは、その場では見ていただけかもしれない園外で受けた感動や経験を、園に戻った後で、記憶が鮮明な内にもう一度振り返り、自分なりに表現することを保育のねらいとしているからである。つまり、子どもに自分の思いや感じたことを表出させることができると共に、園外での経験を子どもの記憶に残すことができる。幼稚園や保育園で動物園に行った時、園に帰ってから画用紙にクレヨンで動物の絵を描くというような活動は色々な保育所で行われているが、これも子どもが経験したことを自分なりに表現する活動の一種であり、リトミックも表現の仕方は異なるが、自分の思いや感じたことを表現する1つの手段であると言える。「絵を描く」というのは、1歳児学級の子どもの発達過程では、描画行為としては簡単であっても、描画媒体を使いこなすという点では、学習訓練と経験の蓄積が必要な活動である。しかし、身体表現や音楽表現では、1歳児学級の子どもも取り組みやすいため、リトミックは、子どもにとって負担感や抵抗感の小さい活動だと言える。

本論のリトミックの実践における保育者の評価と反省としては、「月齢の低い子どもは、初めは入りづらい様子が見られたが、徐々に慣れてくると動きが見られた。いつもはピアノの音が止まったら子どもも止まっていたが、今回は止まるところで不協和音を鳴らすようにすると、子ども自ら耳を傾けて止まる姿が見られた」という意見から、子どもは不協和音に対して反応できることが分かる。また、「やはりこのくらいの年齢には、模倣表現やストーリー性のある

ものが入りやすい。また、ピョンピョンやノソノソ等の擬態語でイメージしやすいように言葉掛けをした」ということだった。

子どもがどう動いて良いか分からない様子の場面があったが、それは分からずに止まっているのではなく、保育者の様子や動きをよく観察し、子どもなりに学習し記憶するために動かなかったと保育者は、推測していた。1歳児学級の子どもの発達過程では、保育者の模倣が非常に活発に行われる段階であると改めて見取ることができる。

4 2歳児学級のリトミックの実践例

(1) 実践記録

実際の保育で行われたリトミックの実践の概要については、表2に示した通りである。

(2) 保育観察の分析と考察

2歳児学級も1歳児学級と同様、「冬の森の中で」を主題にリトミックを行った。1歳児学級で行った森の動物に加えて、「北風小僧の寒太郎」の音楽を取り入れて風になったり、雪や氷を身体で表現したりした。「北風小僧の寒太郎」は、子どもがこの時期に、毎日のように歌っている歌であるため、親しみがあると共に、日々の保育との繋がりがあがる。つまり、リトミックをするための音楽ではなく、リトミックの活動は、日常の保育の一環として行われていることが了解できる。

保育者の言葉掛けは、1歳児学級の実践のように「風になるよ」といった具体的なものではなく、「ヒューヒュー」というような擬音語を使っていた。子どもは音楽と保育者の言葉掛け、そして保育者の動きから風だと感じ取り、身体で風を表現していた。風自体を表現する子どももいれば、自分自身が風に吹かれている様子を表現している子どももいた。風の表現では、保育者の模倣がほとんどであったが、模倣をしながら自由に身体を動かし、表現することを楽しんでいった。

動物の表現においても、何の動物なのかは言葉で示さず、子どもが表現するのを待ったり、「だーれだ？」と問いかけたりして子ども自身でウサギやクマをイメージできるようにしていると考えられる。保育者は手を頭上に挙げ、ウサギの耳を表現しながら飛び跳ねていたが、子どもの中には、しゃがみ込み両手を床につけながら飛び跳ねる姿が数人見られ、1歳児学級の子どものと比べると自分なりに表現する力を身に付けて来ていると考えられる。

ピアノのリズムに的確に合わせて動くことができる子どもは少ないが、音楽の速さを速くすると、子どもの動きも速くなる様子から、音の速さの違いを感じ取っていると見える。

1歳児学級では行わなかった雪や氷（固まる・溶ける）の表現は、動物と比べると具体的なイメージが掴みにくく、表現が難しいと思われる。特に、氷の表現は、第1著者が観察した限り、子どもが氷を想像して固まったり溶けてい

たりしたのかは確定できなかった。しかし、保育者の動きをよく見て真似して動いていたことから、模倣がよく行われていることは確認できた。氷のイメージを伝えるためには、「氷になってみよう」と具体的な言葉掛けがないとしても、保育者が「キーン」「カチッ」等といった擬音語を使用すると子どもが氷をイメージしやすく、氷を想像しながら表現できると推察される。

（3）保育者との実践の振り返り

2歳児学級のリトミックにおける育ってほしい姿としては、1歳児学級の子どもの姿に加えて友達と一緒にすることを楽しむということが挙げられた。つまり、自分と他者を感じられるようになるということである。また、音を感じ、音の変化によく耳を傾け、「注意」の力を育てることも大切である。さらに、主題の世界に入り込んでなりきることを楽しむということも挙げられる。これは、3歳児学級の実践にも繋がることである。

本論で実践したリトミックにおける保育者の評価と反省は、「1歳児学級の子どもがしている様子を「かわいいね」等の言葉にしながら、異年齢児がリトミックをする様子をとっても興味深く見ていた」「1歳児学級と同じ動物の表現を入れていたが、動く速度を変えたり、リズムに変化をつけたりすることで年齢の発達の差をねらった。子どもは、よく音を聞いて動くことができていた」という意見があった。同じ主題や内容でリトミックを行っても年齢によって表現は異なり、発達過程や年齢の差に合わせて保育者が表現を導いていくことや、ねらいを設定することが大切である。また、リトミックが終わった後に、子どもから「あー楽しかった」「またしたい」という言葉が自然に聞かれたが、これは主題の世界に入り込めた証拠であり、なり切ることを楽しみ、保育のねらいを達成できたと言えよう。

子どもがリトミックに対する達成感や満足感を感じられるよう援助することも、保育者の非常に大切な役割である。そのため、子どもの表現をよく観察し、「大きくジャンプできているね」「かっこいいクマさんだね」等の認める言葉掛けを適宜行うようにすべきであろう。

氷の表現については、実践時の状況では、よく分かっていない子どももいたと思われるが、その後、園で氷作りを毎日行うようになり、子どもは「氷って固いんだ」と話したり、太陽が出てくると「あー溶けちゃった」と話したりし、氷に関する経験が蓄積されてきているため、また改めて氷の表現をするリトミック行くと新たな表現が見られると予想される。

動物の表現においても、雪や氷等の物の表現においても、子どもの経験によって表現の幅は異なり、年齢が上がるごとに数多くの自由な表現が見られるようになるのは、実際の経験やリトミックの経験を積み重ねてきたからであると推察できる。また、どの表現においても「この音楽はこの動き」と画一的な表現を指導するのではなく、子どもが自由に想像し表現できるよう、保育者は配慮する必要がある。

5 3歳児学級のリトミックの実践例

(1) 実践記録

実際の保育で行われたリトミックの実践の概要については、表3に示した通りである。

(2) 保育観察の考察と分析

3歳児学級の子どもは「冬の自然」を主題にリトミックを行った。風の表現では、保育者が手を広げる、手をなびかせるように動かす、手を頭上に挙げて回るなど様々な動きをしており、子どもは、その動きを見ながら自分が好きな動きを繰り返し表現していた。2歳児学級の実践と比べると、子どもの表情から、風になりきっている様子が読み取れた。

雪の表現では、保育者が「何の音かな？」と子どもにピアノの音をよく聞かせた後、「あ、雪だ！」と言うと、子どもは口々に「雪だ、雪だ！」と言い、手を雪が上から降るように動かしたり、上を見上げたりしており、2歳児学級の子どもよりも、表現の幅が増えている様子が見られた。また、保育者が雪を集めて投げる雪合戦のような動きをしたり、雪だるまを作るような動きをしたりすると、子どもも一斉に雪を投げる動きを始め、しっかりと雪を想像して表現していることが見取れた。しかし、雪合戦の表現が楽しくなり過ぎると、数人の子どもは、身体を動かすことに夢中になってしまい、ピアノの音を聞くことができなくなっていた。そこで、主担当の保育者（ピアノを弾く保育者）が、子どもが驚くような氷の固まる音楽を何度か弾くと、ピアノの音に気付き、輪の中に戻っていった。このことから、子どもの動きが活発になり過ぎて、ピアノの音を聞くことが難しくなってきた場合には、音楽を変えたり、落ち着いた音楽に変えたりすると、子どもの集中を取り戻すことができると考える。

ピアノの音楽が変わった時、1歳児学級では、保育者が「しー」と静かにするよう呼び掛けることで、音に耳を傾けるようにし、2歳児学級では、動きを止めた保育者の姿を見て、子ども自身も動きを止めていた。3歳児学級では、音楽が変わったことに気付き、自然と動きが止まり、手を耳に添えて音楽を聞こうとしている姿が見られた。この様子から、音楽の変化に合わせて、子どもが表現する想像の世界を楽しんでいたと言える。これは、3年間リトミックを継続的に行った成果として、音楽を聞こうとする力が身に付いていると考えられる。表現の面においては、1歳児学級の実践では、保育者の模倣が中心であった。一方、3歳児学級の子どもは、保育者の模倣は見られるものの、常に保育者に目を向けるというよりも、子ども同士で表現をしたり、自分なりに表現を楽しんだりする姿が見られた。表現することを心から楽しめるのは、継続的なリトミックの実践による結果であると考えられる。

(3) 保育者との実践の振り返り

3歳児学級のリトミックの活動において、育って欲しい子どもの姿としては、2歳児学級と同様に、友達と一緒に動くことを楽しむことに加え、友達と一緒に

に創造することが挙げられる。友達と一緒に創造する遊びとしては、例えば、見立て遊びがある。本論のリトミックの例でいうと、雪の音楽が流れている時に、子どもそれぞれが雪をイメージし、雪合戦の動きをしていたように、友達と一緒にイメージを創り上げるといったことが、具体例として挙げられる。

3歳児学級のリトミックの活動における保育者の評価と反省としては、「最初の風の表現では、2歳児学級とは違う音色を入れることで、子どもの動きも全く違うものになり、その子なりの風になって動いていた」とあったように、保育者自身が意図して、3歳児学級の子どもができる動きになるように、ピアノの音の表現を変えていた。同じ主題や内容でリトミックを行っても、年齢や発達過程によって見られる動きは変化するため、発達の差を考慮してピアノのリズムに変化をつけたり、速度を変えたりすると、発達過程に合ったリトミックを実践することができると考えられる。

雪の表現では、保育者が予想していた以上の表現が見られ、子どもの姿から想像することを楽しんでいただと考えられる。氷の表現においても、何度も繰り返す中で色々なイメージが子どもの中で湧いたり、スケートをした経験がある子どもの表現を見て真似したりして、子どもそれぞれの面白い氷の表現が見られた。このように予想を超えた保育の展開には、より面白くて楽しいリトミックになるよう、弾いているピアノの音楽を即興でアレンジしたり、音楽の長さを長くしたりする等、瞬時に対応する能力が必要である。

3歳児学級では、保育者がこれからリトミックをすることを伝えると、第一声に「やったー！」という子どもの声が聞かれることが多く、リトミックを純粋に楽しんでいるということが、明らかになった。さらに、実際にリトミックをしている子どもの表情からも、リトミックの活動を楽しんでいることが読み取れた。3歳児学級の子どもは、表現することが楽しいと感じるだけでなく、心が解放される気持ち良さを感じることで、リトミックの主題や保育者の姿に集中すること、何かを達成する喜びを感じることで、様々な肯定的な気持ちを感じていると考えられる。

Ⅲ 保育施設におけるリトミックの必要性

1 現場保育者のリトミックに対する認識

先述したように、元々リトミックは音楽教育法として考案され、一般的にはピアノ等の演奏や歌唱のための基礎作りとして、リズム運動やソルフェージュ的な要素を取り入れながら、いずれは即興へとつながる音楽に主軸をおいたカリキュラムが用意されている。しかし保育においては、子どもの表現活動は自発的な活動であり、かつ発達が未分化であることを前提に、表現に関するそれぞれの領域（音楽・造形・身体・言語）を総合的に指導することが望ましいとされている。そのような背景の下、保育におけるリトミックは、本来のリトミックとはねらいや内容が変容してきたと考えられる。保育者の大半は、「リトミック」と聞けば、「音楽を聴き、自由に身体表現をする」という音楽を基に身体表現に重点を置いた活動を想起するだろう。そこにリトミック教室と保育にお

ける活動のねらいや内容の大きな違いがある。一方で、そもそも保育者自身がリトミックの指導に熟知していない現状があるとも考えられる。

リトミックを学ぶ機会は、養成時に授業を受講していれば基本的な理論は学んでいる可能性はある。しかし、そのような科目は、現在の保育に関する免許状や資格取得において必修科目には位置付けられておらず、受講するのは興味のある学生のみである。そのため就職後、保育者らは、試行錯誤しながら自分の今までの経験やイメージを基に実践したり、先輩保育者の行うリトミックを見様見真似で保育に取り入れたりしているのが現状だろう。自分が理論に裏付けられたリトミックを実践しているのか、自分がしている活動が果たしてリトミックと呼べるのかと疑問に思う保育者も少なくないと考えられ、実際に、リトミックと音楽遊びやリズム遊び、身体表現との明確な違いを説明できる保育者は多くは存在しないだろう。しかし、就職後に専門的なリトミックの研修を受けられる機会にもなかなか恵まれない。子どもの実態に合わせて実践を積むことも重要ではあるが、現在、保育の質の向上を目指した様々な研修制度の確立が課題となる中で、リトミックに関しても理論を踏まえて実践を行えるような研修の導入が期待される。

2 低年齢児のリトミック指導

低年齢児の子どもにとって、音楽表現と身体表現の親和性が高いことは、生活の中で音楽を聴きながら体を揺らしたり歌いながら踊ったりなどの姿が多く見られることから、明らかである。そのためリトミックは、保育内容として、発達上無理なく取り入れやすい活動であると同時に、始めは模倣から始められる保育者や友達と一緒に楽しめる活動の1つでもある。平成29年告示の『保育所保育指針』では、保育内容「表現」の1歳以上3歳未満児の保育に関する内容の1つに、「音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ」⁽¹²⁾が挙げられている。それについて、「保育士等や友達など身近な他者と一緒に楽しむ中で、同じリズムで体を動かしているうちに自ずと心が共鳴し、一体感を味わうことの喜びも感じるようになる」⁽¹³⁾と解説されるように、他者と楽しい活動を共有し楽しむことが、生きる力の基礎となる心情・意欲、態度を育てることにもつながっていく。そのような育ちを期待するためには、なるべく早い発達過程からリトミックに親しめるような活動を取り入れ、その楽しさを伝えていくことが望ましいだろう。

活動を楽しむための主題設定は、特に重要であり、子どもがイメージしやすく分かりやすいものであることが、必須条件となる。例えば、本論の事例にあるように、まずは、親しみのある動物になる（なり切る）など、子どもにとって興味や関心に沿った身近な題材の設定が望ましい。また、低年齢児には、保育者自身が楽しみながら具体的な表現モデルを示すことが必要であり、保育者は、それを子どもが模倣するという自覚をもつことが重要である。保育者のモデル提示がかえって子どもの表現の幅を狭めないよう、保育者には固定概念にとらわれない多様な表現力が求められると言えるだろう。

表 1. 保育施設における1歳児学級のリトミックの実践事例

| 観察日時 | 201X年1月19日10:05~10:10 | |
|---|--|---|
| 対象・指導 | 1歳児学級／男児10名・女児9名，指導者M.N. | |
| ねらい | ピアノの音を聞いて動いたり模倣したりして遊ぶことを楽しむ。 | |
| 子どもの動きと言葉 | 保育者の動きと言葉 | 音楽 |
| <p>○歩く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者や周りの子どもに付いていくように歩く。 <p>○ウサギに変身する。(ジャンプ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者の真似をして両手を頭の上に乗せウサギの耳をつくりながら，ジャンプする。 <p>○クマに変身する。(這う)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者の這う姿を見てから，真似をするように這う。 <p>○眠る。(転がる)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・寝転がる子どももいれば，どうしてよいか分からず立ったまま固まる子どももいる。 <p>○歩く。</p> <p>○止まる。</p> <p>○再び歩く。</p> <p>○オオカミが出てくる音を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不安そうな顔をし，動きを止める。 ・「オオカミ？」と言う子どもがいる。 <p>○走る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「きゃー」と声を上げながら思いきり走る。 <p>○集まる。</p> <p>○雪が降ってくる音を聞く。</p> <p>○スキップをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ギャロップのような子もいれば走ったり歩いたりする子もいる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・「ピョンピョンウサギさんがやってきたよ」と言葉を掛け，ウサギの真似をしながらジャンプする。 ・「次はのっそりクマさんだよ」と言葉を掛ける。 ・這っている最中は，「のし，のし」とピアノのリズムに合わせてながら繰り返し言う。 ・「は～何だかたくさんお散歩して疲れちゃった」「おやすみ」と話しながら寝転ぶ。 ・「みんな，起きて！お散歩に行こうよ」と言葉を掛ける。 ・手を大きく振り，「いち，に，いち，に」と言いながら，リズムに合わせて歩く。 ・歩く動作をピタッと止め，固まる。 ・立ち止まり，「あれ？誰？」と話す。オオカミの音楽が徐々に大きくなったら「大変だ！オオカミだ！逃げろー！」と言葉を掛ける。 ・「逃げて」「しー」と言いながら体を丸めて小さくし，サークルの中へ集まる。 ・明るい表情へと変わり，「あ，雪が降ってきた」と子どもをサークルの外へ誘う。 ・手で雪を表現しながら「雪だ～」と言い，スキップをする。 | <p>♪もりのこみち</p> <p>♪ウサギ</p> <p>♪クマ</p> <p>♪シューベルトの子守歌</p> <p>♪もりのこみち</p> <p>♪即興</p> <p>♪もりのこみち</p> <p>♪即興</p> <p>♪雪</p>      |

表2. 保育施設における2歳児学級のリトミックの実践事例

| 観察日時 | 201X年1月19日 10:10~10:15 | |
|--|--|---|
| 対象・指導 | 2歳児学級/男児12名・女児2名, 指導者 M.N. | |
| ねらい | ピアノの音色やリズムを感じながら動いたり表現したりすることを楽しむ。 | |
| 子どもの動きと言葉 | 保育者の動きと言葉 | 音楽 |
| <p>○風になる。 ・手をなびかせ, 風になりきって小走りする。</p> <p>○ピアノの音を聞く。 ・保育者の動きが止まり, ピアノの音に耳を傾けている様子から動きを止めて立ち止まったり, 保育者の真似をして耳に手を添えて音を聞く子どももいる。</p> <p>○スキップをする。(雪) ・スキップをする子ども, ギャロップをする子ども, 走る子どもがいる。</p> <p>○ピアノの音を聞く。 ・音が変わったことに気づき, 立ち止まる。</p> <p>○氷になって固まる。 ・保育者の真似をして固まる子もいれば, よく分からず周りの様子を伺っている子どももいる。</p> <p>○スキップをする。</p> <p>○氷になって溶ける。 ・保育者の様子を見て真似をしながら一緒に倒れる。(氷の固まる, 溶ける表現とスキップをランダムに繰り返す。)</p> <p>○ウサギに変身する。(ジャンプ) ・手を挙げ耳をつくりながらジャンプする子どももいれば, しゃがんで両手を床につけながらジャンプする子どももいる。 ・リズムが速くなったら速くジャンプする。</p> <p>○クマに変身する。(這う) ・初めはゆっくり這うが, リズムが速くなると速く這う。</p> <p>○眠る。 ○スキップをする。(雪)</p> | <p>・「ヒューヒュー」と言いながら手を横に広げ, 小走りする。</p> <p>・素早く動きを止め, 子どもがピアノの音に注意を向けることができるよう, 耳に手を添えてピアノの音をよく聞く。</p> <p>・明るい表情でスキップをする。</p> <p>・「あれ?」と言葉を掛けることで, 音が変わったことに気づきにくい子どもが気付けるようにする。</p> <p>・「あっ」と言いながら, 動きを止め, 固まる。</p> <p>・♪ゆきやこんこが聞こえてきたら, スキップをする。 ・「あ〜」と言いながら, 力が抜けて膝から崩れ落ちるように倒れこむ。</p> <p>・「ビョン, ビョン」と言いながら手を挙げウサギの耳をつくりながらジャンプする。</p> <p>・「誰だ?」と問いかけたり, 子どもが動き始めるのを少し待ってから這う。</p> <p>・寝転がる。</p> | <p>♪北風小僧の寒太郎</p> <p>♪即興</p>  <p>♪雪</p>  <p>♪氷(固まる)</p>  <p>♪雪</p> <p>♪氷(溶ける)</p>  <p>♪ウサギ</p>  <p>♪クマ</p> <p>♪シューベルトの子守歌</p> <p>♪雪</p> |

表3. 保育施設における3歳児学級のリトミックの実践事例

| 観察日時 | 201X年1月19日 10:15~10:25 | |
|---|--|---|
| 対象・指導 | 3歳児学級／男児8名・女児5名, 指導者 M.N. | |
| ねらい | 冬の自然の中で感じたことを友達や保育士と一緒に表現することを楽しむ。 | |
| 子どもの動きと言葉 | 保育者の動きと言葉 | 音楽と子どもの様子 |
| <p>○風になる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者の真似をして、くるくる回ったり手を風に見立ててなびかせたりする。 <p>○ピアノの音を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・風とは異なるピアノの音が聞こえてくると、動きを止めたり、しゃがんだりして音を聞こうとする。 <p>○自由に雪の表現をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「雪だ〜!」と言いながら手を雪が降るように動かしたり、保育者の真似をして雪合戦や雪だるまを作る動きをしたりする。 <p>○寒さを感じる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者の真似をして寒がる子もいれば、何を表現しているのか分からずにいる子もいる。 <p>○氷になって固まる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音を聞いて動きは止まるものの、何の音なのかは分かっているようである。 <p>○氷になって溶ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者の真似をして倒れる。 <p>(自由な雪の表現, 寒さを感じる, 氷をランダムに繰り返す)</p> <p>○氷上での表現をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者の真似をしながら、滑る・回転する・踊るなどの表現をする。 <p>○スキップをする。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ子どもに「寒いね」と言葉を掛ける。 ・走りながらくるくると回る。 ・手をなびかせる。 ・手を飛行機の羽のように上下に動かす。 ・動きを止める。 ・両手を耳に添えながらピアノの音を聞く。 <ul style="list-style-type: none"> ・「あ、雪だ!」と言葉を掛ける。 ・手で雪が降る様子を表現したり、雪合戦や雪だるまを作る表現をしたりする。 <ul style="list-style-type: none"> ・「寒いよ」と言葉を掛ける。 ・寒さで震える動作をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・凍えた様子のまま「あっ」と言って固まる。 <ul style="list-style-type: none"> ・力が抜けて膝から崩れ落ちるように倒れこむ。 <ul style="list-style-type: none"> ・「シュー、シュー」と滑っているような擬音を言う。 ・スケーターのように滑ったり回ったりする。 ・スケートリンクの上のように踊る。 ・スキップする。 | <p>♪北風小僧の寒太郎</p>  <p>♪雪</p>  <p>♪雪（短調）</p> <p>♪氷（固まる）</p> <p>♪氷（溶ける）</p>  <p>♪スケーターワルツ</p>  <p>♪雪</p> |

IV 総括と課題

第1 著者が、幼い頃リトミック教室へ通っていた経験から、現場で働く保育者が挙げるリトミックによって身に付く最も大きな力として音楽的な学びの要素である「リズム感」が、第一に挙げられると当初は考えていた。しかし、研究協力園であるX保育園は、全く異なる部分にねらいを定め、リトミックを取り入れた保育を行っていた。それは、子どもの「表現」の力である。X保育園では、表現力や想像力といった豊かに生きる為に必要な人間の能力の部分に重点を置いてリトミックが行われていた。このことから、リトミック教室で行われるリトミックと保育所で行われるリトミックには異なる点があり、指導する側がねらいとする子どもの姿も異なるのではないかと考えた。そして、保育所で行われるリトミックから身に付く力は、多様なのではないかと推察した。以上のような理由から、本論では、実際に保育所で行われるリトミックの実践から、それによりどんな力が子どもに身に付くのか、そして今後の保育所におけるリトミックの在り方について考察してきた。第二報では、保育施設における4・5歳児学級の事例を中心にして、子どもの主体的な身体表現を引き出すリトミックの保育実践研究を報告する。

参考・引用文献

- (1) 遠藤晶：「幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について—身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して—」、『武庫川女子大紀要』第54巻，93-95，96頁，2006.
- (2) 多胡綾花：「幼稚園における身体表現あそびの実践内容について—保育歴による違いから—」、『湘北紀要』第33号，21，22-32頁，2012.
- (3) 岩崎光弘：『リトミックってなあに』，ドレミ楽譜出版社，24-25，153-154頁，2012.
- (4) 多胡綾花：「「身体表現あそび」の実践状況と実践上の問題点について」、『湘北紀要』第34号，59-61頁，2013.
- (5) 石丸由理：「幼児教育の歴史と概説 ダルクローズのリトミック：日本への導入期に携わった人物の教育活動」、『国際幼児教育研究：国際早期教育研究』Vol.18，52，55頁，2010.
- (6) 長島礼：「保育現場におけるリトミックの理解に関する—考察—質問紙調査から見える課題—」、『教育学論究』第2号，91-93頁，2010.
- (7) 土井禮子：「現代における幼児教育と天野式幼児リトミックの関連—天野式幼児リトミックを実践して—」、『研究紀要』No.34，3頁，2011.
- (8) 岩崎光弘：『リトミックってなあに』，ドレミ楽譜出版社，24-25，153-154頁，2012.
- (9) 多胡・前掲書(4)，59-61頁.
- (10) 長島礼：「保育現場におけるリトミックの理解に関する—考察—質問紙調査から見える課題—」、『教育学論究』第2号，91-93頁，2010.
- (11) 井上裕子：「「リトミック」の研究—リトミックって何をするの—」、『大

阪城南女子短期大学紀要』第50巻，182頁，2015.

(12) 厚生労働省：『保育所保育指針』，フレーベル館，21頁，2017.

(13) 厚生労働省：『保育所保育指針解説』，フレーベル館，171頁，2018.

Childcare Practice Study of Rythmique that Draws Proactive Physical Expression from Children (1st Report) —Mainly Including Cases of Classes for One, Two, and Three Years Old in a Childcare Facility—

Saori KOTAKE*1, Noriko BABA*2, Kei TAKAHASHI*3, Yuzo WATANABE*1*4, Toshiyuki TAKAHASHI*5

When we outline recent prior-research with key words, “physical expression”, “music education”, “Rythmique”, and “play”, it was clarified that how we consider Rythmique had been changed in the history over 100 years and new study for Rythmique practice is required. Accordingly, this article discussed what children learn from Rythmique practice in a childcare facility and what is grown. As the result, the followings were suggested. i. One years old children are in a phase where they actively imitate their guardians. ii. For a class for two years old children, guardians need to take care of children so that they can freely express. iii. For a class for three years old children, it is important to feel comfort by which their mind can be released and concentrate on a subject of Rythmique or appearance of guardians, and feel pleasure to achieve something through how fun it is to express.

Keywords: Child (Children), Physical expression, Rythmique, Childcare practice, Classes for One, Two, and Three Years Old

*1 Minan Manmaru childcare center

*2 The Department of Childhood Education, The Faculty of Childhood Education, Kurashiki Sakuyo University

*3 The Major of Child Education, The Department of Music, Sakuyo Junior College of Music

*4 The Joint Graduate School (Ph.D. Program) in Science of School Education Hyogo University of Teacher Education

*5 Graduate School of Education, Okayama University
